

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Limau 村の家族，親族，村落の構造： ハルマヘラ調査ノート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード: 作成者: 松澤, 員子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004574

Limau 村の家族, 親族, 村落の構造

—ハルマヘラ調査ノート—

松 澤 員 子*

Field Notes on Family and Community Organizations in Limau
Village, North Halmahera

Kazuko MATSUZAWA

This paper provides data on the family, kinship and community organizations of Limau Village, collected during the period September 30—November 18, 1976, when the author was a member of the Halmahera Expedition Team of National Museum of Ethnology. A more detailed report in English will be published later.

Limau Village is located on the northeast coast of Halmahera, and consists of 41 households with 246 individuals. Most of the population are Galela people except a few who married villagers or migrated to the village from other areas of Halmahera.

A distinctive feature of the society is the frequent migration into and out of the village. Migration seems not to be motivated by economic factors although the abundance of sago palms and fish resources may be a major attraction. Other factors that affect the propensity to migrate still remain ambiguous.

The high social mobility affects the social organizations. The nuclear family is dominant, and it often contains temporary residents of kinsmen who have migrated from other villages but not yet established their own residence. Bilateral kinship relations seems to be a core functional social network of the people's lives. Bilaterally related kinsmen who are recognized to be descendants from one ancestral pair are called *bolu moi* (one crowd). The village as an administrative unit does not function as a cooperate group in any sense. However, four core families splitting into 21 households are indigenous to the village. These families form an important

* 国立民族学博物館第2研究部

cluster, absorbing immigrants through marriage, and providing formal and informal leaders. A structural frame of the society seems to be noninstitutionalized kinship bonds, but this must be substantiated through further detailed investigation.

はじめに	3. 結婚と居住
1. 家族構成	4. 親族関係と移動
a. 静態分析	a. 親族認識
b. 動態分析	b. 親族関係の重要性
2. 生活共同体としての世帯	5. Limau 村における人口の移出入
a. 家族と世帯	a. 移住と来住の資料から
b. 家族, 世帯, 親族の認識	b. Limau 村の構造
c. 世帯の経済的基礎	おわりに
d. 土地の所有	

はじめに

この調査ノートは、昭和51年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）に基く国立民族学博物館ハルマヘラ調査隊の一員として現地調査を行った際に収集した資料に若干の説明を加えたものである。この調査の概要は、すでに石毛隊長によって報告されているので、ここでは重複をさけたい。

Limau 村滞在 2 カ月足らずという短期の調査であり、皮相的な観察しかできなかったが、その期間に、私の分担した「家族と村落の組織」の調査を行った。資料収集にあたっては、先ず個別訪問による家族の悉皆調査を行い、系譜や婚姻関係、移住来住についての経緯などについて聴取し、伝統的慣習については数人の古老たちから口述を得た。

もとより資料の不完全さを充分認めつつも、今だに北ハルマヘラの諸種族に関する社会人類学的報告は皆無に等しいので、このような資料の報告も、今後の研究発展のために無意味でないと考えるからである。今回の報告は現状にとどめ、伝統的な家族や村落の組織、婚姻や葬儀の慣習について聴取した資料は稿を改めて報告したい。

1. 家族構成

Limau 村は、海岸に並行して作られた道路の両側に一列に立ち並ぶ 41 戸の家と、



写真1 Limau 村 の 家 並

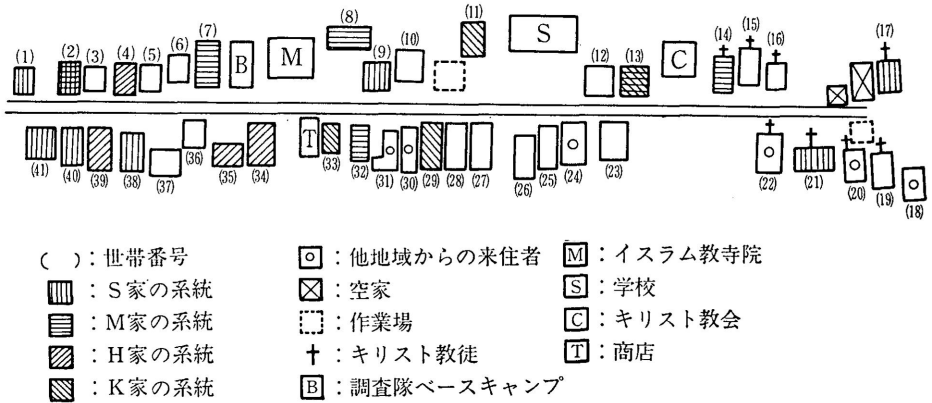


図1 Liman 村 の 家 屋 配 置 概 念 図

そこに生活する 246 人の人口から構成される小さな村である (図1 参照)。**Galela** 語で tahu と呼ばれるそれぞれの家は、竹または角材で柱を組み、サゴヤシの葉柄で編んだ katu (インドネシア語では atap) で屋根を葺き、割り竹や katu で壁や仕切を作った平地式家屋である。その内部構造は、図2 に示されたものが一般的で、どの家も大差なく、およそ 32 m² 位である。この家に夫婦とその子供たちを中心にした家族が生活を共にしている。

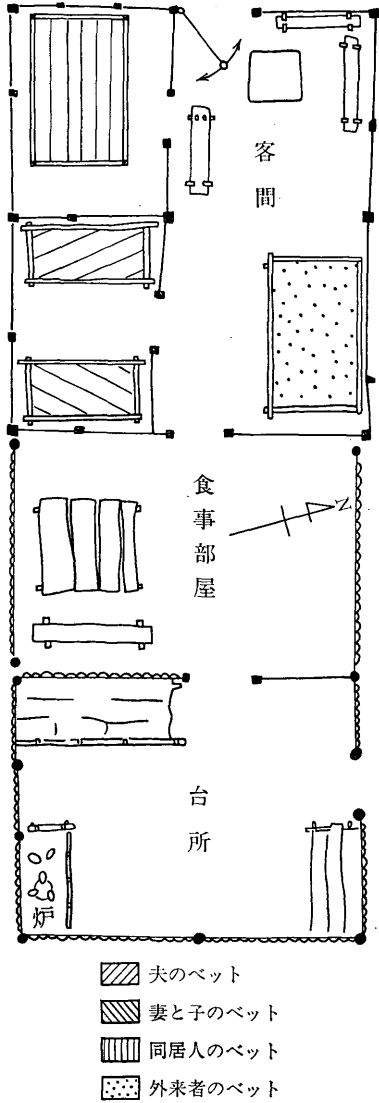


図2 No. 32の家の平面図(石毛原図)

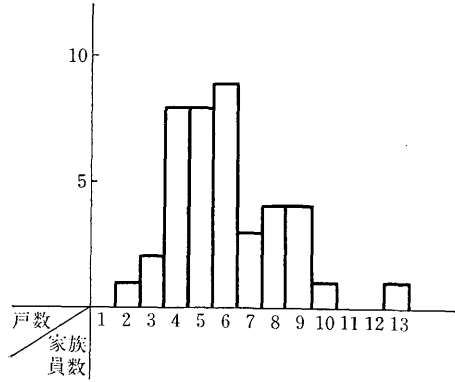


図3 家族員数の分布

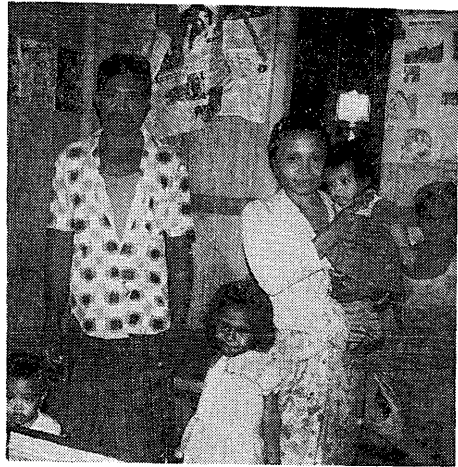


写真2 H家の家族(大胡撮影)

表1 家族の類型

N	21
N+C	11
L	6
L+C	1
J	2
41	

N: 夫婦家族 L: 直系家族
J: 傍系家族 C: 同居者

a. 静態分析

今、その家族構成を数字の上から見ると、一戸平均6人で、その実態は図3の如く、4～6人を頂点に2人から10人までの分布を示している。13名という家族構成は例外で、この家の夫は、3度再婚をしており、5人の子供と現在の妻の連れ子2名、すでに死亡した彼の妹の子供3名を養っており、家族員数が多くなっている。

次に家族構成を類別的にみると ①夫婦とその未婚の子供たちからなる夫婦家族、②直系2世代の夫婦とその未婚の子供たちからなる直系家族、③既婚の2人以上のキョウダイと彼らの未婚の子供たちからなる傍系家族に分類することができる(表1参照)。

Limau 村では、同居者を含む家族は11戸で、全戸数の1/4を占めている。ここに含まれる同居者とは、その大多数が、その世帯主である夫、または妻の未婚のキョウダイやオイ・メイであり、いずれの場合もその両親と死別した子供たちである。また、図1におけるNo. 4とNo. 30の家にはその家族と全く親族関係を持たない同居者がいる。しかしその同居者の場合に共通している条件は、①隣には自分のキョウダイの家族がいる、②同居させてもらっている家族にはベッドに余裕があり、③その家族と同居者は同郷の出身である、ということである。従って、キョウダイのところに同居する筈の者が、たまたま他人の家に同居していると考えてよいだろう。また彼らは一時的同居者である。

b. 動態分析

先に述べた調査のある時点での家族構成の類型分類において現われた直系型、傍系型家族は、この社会の理想型であり、また制度的様相であるのだろうか。このことを明らかにするためには個々のケースを動的に考察してみなければならない。先ず資料に戻りたい。

直系家族の形態をとっている6家族は、次の2つの類型に分けられる。①結婚した息子または娘の家族が、その親の家に一時寄留している (No. 13, No. 30, No. 35, No. 41) か、または、②親が息子や娘の家族に寄留している (No. 1, No. 16, No. 33) 場合である。傍系家族の場合は (No. 25, No. 40)、いずれも妻の弟の家族が一時寄留している。

今ここで一時的寄留と述べたのは、同居者が年老いた親である場合を除いては、早い機会に他村、または他の地域に移住したいとか、村内に家を建てて独立したいという意志を明確にしておき、すでにその準備も進められている場合もあるという理由によっている。

更に詳しく資料を検討すると①型のうち、No. 13, No. 35, No. 41 の同居者は、結婚して家を出た後数年して、家族で妻の生家に戻って来たのであり、やがてどこかに移住したいと思っている。No. 30 の場合には、娘が結婚して夫を親の家に迎えて親の家族と生活を共にしているが、早晚この村内に家を建てるか、夫の出生地である Maba に移住するか考慮中であるといっている。上の実例からも明らかであるように、ここでは新処居住 (neolocal) が一般である。

また年老いた親の扶養についても、特定の子の扶養の義務は制度化されていない。むしろ子供はどの子であれ、親の老後の扶養をしなければならぬし、他方、親は子供の家族の居住場所や生活条件によって自分たちの身を寄せるところを選ぶというのが一般である。No. 16 に同居する父も、Limau 村から約 90km はなれた Kau (図 4 参照) にいる娘のところを訪ねると数カ月も滞在するが、Limau 村にはサゴヤシが多く、katu を作って現金収入を得ることが容易であるのでこの息子の家に同居しているという(写真 3)。けれども彼は、自分の幼少年時代を過ごした Kau に戻りたいという希望を持っている。更に、傍系家族の場合も、結婚後数年他の地域に移住した後、キョウダイを頼ってこの村に来住した家族である。移動性の高いこの社会の特徴が、家族構成の側面にも深いかわりを持っている。

即ち、Limau 村では、直系型、傍系型家族は一時的様相であって、制度的様相ではない。なぜなら、後に見る如く、直系型、傍系型家族を構成する社会的制度(家産の相続や分割、地位の継承、婚姻による居住規制など)を欠いている。むしろ制度的には夫婦家族を基本としているのである。その家族は、結婚によって形成され、子どもの出生によってその構成員を加え、やがて子どもたちの結婚、独立、そして夫婦の死という短いサイクルで消滅していくのである。

2. 生活共同体としての世帯

a. 家族と世帯

これまで家族として扱って来た Limau 村での最小の社会集団単位は、より厳密には、世帯といった方が適切である。なぜなら、それは夫婦とその子どもたちを核にして、時にはいく人かの同居者を含みながら、寝食を共にする生活共同体であるからである。

この村には 41 戸の家があるが、それぞれ建物としての家は、たとえそれが 2 つの夫婦家族を含んでいても、親類関係にない親子を含んでいても、その同居人たちは間借

人ではなく、一時的であっても、それぞれの世帯の中に編入されており、41世帯を構成している。この世帯の成員構成をみるなら、27世帯は家族即ち世帯であり、11世帯は家族と同居者、そして3世帯は2つの家族を含んでいることになる。従って厳密に家族を規定するなら、この村には44家族が数えられることになる。けれども家族の類型を考えた場合と同様に、ここでも世帯構成を動的に把えるならば、家族員以外の同居人は一時的寄居者に過ぎないのであるから、この社会では家族は、すなわち生活集団 (domestic group) としての世帯であるといえることができる。

b. 家族、世帯、親族の認識

村人たちは、家族または世帯を ‘*satu pamili*’ という。しかしこれはインドネシア語であるから、これに対応する Galela 語を尋ねると、苦慮の末、*aheli moi* あるいは *bolu moi* と答えてくれる。*aheli* はマレー語の *ahli* (関係、親類、人びと等を意味する) であって、Baarda によれば、*aheli moi* は Galela 族の間では ‘子孫’ の意味に用いられているという [BAARDA 1895: 40]。即ち、‘*ahli*’ ということばはかなり以前に Galela 語の中に入っており、*moi* (一つ) と組み合わせられ、‘子孫の一群’ という意味に用いられてきたと考えられる。他方、*bolu moi* は Galela 語で、Baarda は ‘人びとの一群’ と訳している [BAARDA 1895: 329]。Limau 村の人びとによると、*aheli moi* または *bolu moi* は、①一つの群、即ち昔は、両親とその息子たちの家族、時には娘たちの家族も含む数家族が、*bangsaha*¹⁾ という大きな家に生活していたので、その群を意味する、②3世代上の祖先を共通にする双系的系譜親族で、結婚が許されない人びとの群、又は③5世代上の祖先を共通にする子孫のすべてであるという3通りの説明がある。いずれの説明も、ある祖先を頂点に双系的に下方に広がる血縁親族を意味している。唯、この二つのことばが、*bangsaha* に住む大家族や現在の家族の意に用いられると、それらは血縁関係にない婚入者をも含み得るのか否かが問題になる。このことに関しては、人びとの認識の中で、血族と姻族は明確に区別されていること、親族名称の上でも区別があることを考慮するなら、姻族は除外されていると言ってよいであろう。しかし、家族の場合も、やがてはそれは *bolu moi* を形成する基盤であると考えられる。私の調査では、社会単位としての家族や世帯を

1) 村の古老によると、50年ほど前までは、まだ Galela の村々には *Bangsaha* があちこちに残っていたが、第2次大戦以後は完全に消滅してしまった。それは庇を八角形に広げた大きな家で、その中心部には6または8個の独立した部屋があり、それぞれの部屋は夫妻の寝室に当てられていた。そこには兄弟、従兄弟を中心に数家族が生活を共にしていたという。

表現することばを見出すことはできなかった。現在では、家族は行政上重要な社会単位であるが、それは *pamili* として用いられ、人びとも日常的にそのことばを用いている。

c. 世帯の経済的基礎

それぞれの世帯は3～6筆ほどの焼畑を耕作し、漁撈を行い、またサゴ澱粉を採集してほとんど自給自足の生計を立てている。食料資源以外の生活資源（家屋建築の材料、生活用具の材料、たき木など）もほとんど世帯の成員によって山から採集され、利用されている。自給できない生活必需品（米、嗜好品、衣料など）の購入のためには現金収入が必要である。村人たちは、サゴ澱粉、サゴの葉で作った *katu*、山から切



写真3 *katu*を作る Kau からの来住者

り出した材木、燻製魚、その他の余剰生産物を売って現金収入を得ている。この現金収入は、家族の財として、また個人の財として使用され、貯えられるが、同居者を含む共同体の財としては考えられない。例えば No. 40 のように、姉夫婦と弟夫婦の 2 家族が一つの世帯となっている場合、弟夫婦はやがて独立するための準備として、自ら開墾した焼畑を経営し、また自分たちの現金収入を得ているが、それは姉家族と共同の家計には繰り入れられない。もちろん、互いに市場で米を買って来て共に食べたり、購入した生活用具を共同で使用したりしても、現金収入は、多分非常にわずかであろうと想像するが、別の家計として考えられている。また No. 13 の場合には、娘夫婦が同居しているが、彼らはその夫の出身地である Makian に帰る予定で、自分たちの畑も開かず母の畑の手伝いをしたり、他の家族の漁撈や畑仕事を手伝って現物をもらって来て母の世帯の生計を助けているが、katu を売って得た現金収入は夫婦の生計となっている。

この村では、子供たちは成長するとその多くは他の地域に出かけていく。この場合に、彼らは出稼ぎという明確な目的を持っていないようである。最近では、友だちと他の地域に遊びにゆくことが多いと親たちは言うが、青年たちは、数カ月、あるいは 1～2 年滞在し、そしてしばしば行き先で配偶者を見つけて結婚するという。また村に残っている者も成長すると自分の畑を開き、自分で現金収入を得て、自分の衣服や身のまわり品を買って独立への準備をはじめるのである。

d. 土地の所有

Limau 村の集落の背後には湿地帯が広がり、サゴ林を形成している。その向こうは山地帯となり、その山の斜面では焼畑農業が行われている（詳しくは佐々木の報告参照）。現在は、土地はすべてインドネシア国有である。Limau 村は、サゴ林や山地耕地の利益権を認められた領域を持ち、村長によって管理されている。しかし隣村との間に明確な行政上の境界線がある訳でなく、この領域は基本的にはむしろ伝統的な soa²⁾ の占有領域が人びとの間で意識されているのではないかと思われる。いずれにしても、村びとは、新来住者であっても、村長の許可をえて山の斜面に焼畑を造成することが出来るのである。そして造成した耕地に関しては、その個人や家族の耕作権が認められるのであって、所有権を持つのではない。

2) soa は Maluku 地方一帯に認められる社会集団で、その多くは父系親族集団、父系リネージとして報告されている。Galala 社会における soa については今回の調査で収集した資料をまとめて報告する予定であるが、簡単に言えば、父系親族を核としながらも双系の親族や姻族も含む居住集団である。それぞれの soa は共有の領地を持っていた。

サゴヤシに関しては、サゴヤシそのものの所有権が認められており、それはかつてその所有者の祖先がそこにサゴヤシを移植し、広がったものであると言われている[吉田 1977: 56]。けれども、サゴヤシの所有権というものは、現実には非常に曖昧なものであり、相続の対象として考えられる財としての意味はほとんど無いに等しいのではないかと私は思っているが、詳細な調査はできなかった。さて、村には共有のサゴヤシ林もあり、人びとはそこで自由にサゴ澱粉の採集を行っている。

この社会には、多くの狩猟・採集民の場合のように、いくらかの個人財の他には超世代的に相続されていく財はなく、むしろ豊かなサゴヤシ資源と漁獲資源に世帯という生活共同体の経済的基盤をおいているのである。このような条件が、この生活共同体の超世代的存続の必然性を要求せず、従って相続や継承、またさまざまな規制の制度化のきわめてゆるい、そして構造上自由度の高い集団が形成されてきたと考えられる。

しかし、Galela 族のその商業の中心地 Soasio から内陸部に位置する Galela 湖周辺の村落では、すでに商品作物としてのココヤシ栽培が盛んであり、耕地もかなり常畑化しており、更にセメントで固めたかなり耐久性の高い家屋が建てられている。残念ながらそこでの家族調査の機会を得なかったが、Limau 村に比較して、ココヤシや畑地、また家屋などの所有や相続をめぐるなんらかの制度化がみられるかも知れない。

3. 結婚と居住

Limau 村では、結婚によって夫婦は新しい世帯をつくる。即ち、新処婚を原則と

している。結婚が禁止されるのは、bolu moi の関係にある親族間で、それは通常父方・母方の第2イトコの範囲を包含する。現在、この村に居住する44家族の系譜調査でみる限り、この禁止範囲での結婚は一例もない。

さて、この44家族について、それぞれ夫と妻の出生地と結婚による居住の移動をみると第2表の如くである（ ）で囲まれた数字は、夫妻ともに

表2 結婚による居住

夫 \ 妻	L	G	N	計
L	6	9	10	25
G	6	0	(2)	8
N	7	(1)	(3)	11
計	19	10	15	44

L: Limau 村出身

G: Limau 以外の Galela の村出身

N: Galela 以外の地域出身

Limau 村以外の出身者で、結婚後この村に来住した家族であり、6家族が含まれる。これらの家族を差し引いた38家族についてみると、村内婚は6組(16%)、村を単位としてみた夫方居住は13組(34%)、妻方居住は19組(50%)であり、村内婚はきわめて少なく、この村の女と他村や他地域の男との結婚が半数を占めている。以上は資料を類型別、数量的に分析した結果であるが、家族構成の場合と同様に、ここでもこの結果から妻方居住がより一般的であると見ることはできない。村内婚が少ないのは、その人口が小さいために、結婚禁止範囲を越える配偶者は村外に求めなければならないからであり、また妻方居住の一般的傾向は、人びとの移動と密接にかかわり合っていると考えられる。

移動は一般に家族単位で行われるか、未婚の青年男子が単身で行うかであり、未婚の女性が単身で移動することは稀である。現在、Limau 村から単身で移出している女性は2人で、彼女たちはいずれも Galela の中心地、Soasio 村に家事手伝いとして働きに出ている場合である。他方、未婚の男性で移出しているのは8名で、Galela 地域1名、Tobelo 1名、Loloda 1名で、女性に比較して多い。更にまた、第2表の他地域出身の妻7名の場合は、いずれもこの村の男性が単身移出して、その地で知り合っここに連れ帰った妻たちである。逆にこの村の女性が他地域出身の男性と結婚している10組は、いずれの場合も、夫となった者が両親や兄弟と、友人と、また単身この村に来住して、その後ここで結婚し住居を定めた人びとである。従ってこれらを妻方居住とすることに問題がある。

更に、不健康な熱帯雨林の生活環境の中で、マラリヤその他の疫病による死亡率も高く、男も女も50才位になるまでには、大抵の者が再婚を経験している。また離婚について、どのような社会的規制があるのか不明であるが、実際には決して少なくない。そして離婚した者もすぐに再婚していく。子どもたちは通常その家や村に残る親に引き取られるといわれている。先に述べた世帯の経済生活を考えてみても、離婚に伴う財の分配や権利についても困難はきわめて少なく、離婚を規制する要因とはならないようである。唯、女は男に比して独立して生計を立てることは困難で、再婚するまで、キョウダイの家に同居した者が2例あるが、いずれも1年以内に再婚している。

第2表では、離婚や死別による再婚の場合を入れていないが、現実には再婚経験者が多く、その居住は大変複雑な様相を示しているのである。それにも拘らず、この社会には、Galela 族内婚の規制も、婚姻による居住の制度化もなく、むしろ、それぞれが自分の配偶者に会ったところで結婚し、自分たちの生活により好条件の場所を選んで居住を定め、世帯を形成していくという特徴がみられるのである。

4. 親族関係と移動

少なくとも現在の Galela 族の社会には、機能的な親族集団は存在しない。Maluku 諸島一帯に広く認められている soa (多くの場合父系親族集団) は、かつてはこの社会においても機能していたと言われているが、現在では自分の祖父母などの所属していた soa の名がおぼえられていのみで、新しい行政単位としての kampung (インドネシア語で村) におきかえられてしまっている。

a. 親族認識

Galela 語で bolu moi (又は aheli moi) と呼ばれる親族は、今も人びとの社会生活の諸側面において大切な関係であり、またこの bolu moi を中心とした kinship-network がこの社会の人々の移動や人間関係を理解する鍵ではないかと考えられる。

さて、bolu moi は‘一つの群’を意味し、3世代上の祖先 dopora を共通にする系譜的親族を包含する(表3参照)。時には5世代上の祖先 galawewe を共通にする子孫とも言われるが、これは理想であって、現実にもその範囲を確認しているものはいない。移動性が高く、加えて50才代まで生きながらえる人の少ないこの社会では、人びとが互いの系譜関係を明確に記憶していることはむしろ稀である。Limau 村で行った系譜の聴きとり調査でも、dopora からの子孫が明らかになったのは3家族であり、一般には tete や ede からの系譜関係が認識されているに過ぎない。それにも拘らず、村人たちは、単に村内にいる親族だけでなく、Galela の他の村々や、他の地域にいる bolu moi を知っている。

表3 直系親族の名称

	m	f
G ₊₅	GALAWEWE	
G ₊₄	DOTU	
G ₊₃	DOPORA	
G ₊₂	TETE	EDE
G ₊₁	BABA	MEME
G ₀	EGO	
G ₋₁	NGOPA	
G ₋₂	DANO	
G ₋₃	TOPORA	
G ₋₄	DOTU	
G ₋₅	GALAWEWE	

姻族については、Galela 語で二つのことばがある。一つは geri-doroa で男の自分からみた妻の bolu moi を指し、他は dunu-dapu で女の自分からみた夫の bolu moi を指す。血族と姻族の関係や、姻族の社会的義務などに関して十分な調査はできなかったが、自分と姻族の関係はさまざまな慣習法で規制されている。このことはやや複雑な Galela 語の姻族名称と対比して検討されなければならない。(姻族に対する

行動規制は、親族名称の報告で取扱いたい。)

b. 親族関係の重要性

親族関係、特に bolu moi の関係は、人びとの生活のどのような場面で機能を持っているのであろうか。

先ず第一に、近くに住む bolu moi 同志の間では、世帯が異なっても生計の相互扶助が行われることはもちろん、両親を失った幼児たちを養育する義務があると考えられている。例えば、No. 38 の世帯主はこの調査の7カ月前に夫と死別した。5名の幼児を抱え、耕作に従事することも困難であり、女世帯には魚の獲物もない。いずれ再婚を考えているが、今はこの村にいる弟妹、イトコの世帯から畑作物や魚、サゴ澱粉などの食料をもらって生活しているという。また、No. 14 の D のように、幼くして両親を失い、母のイトコによって育てられたという人も少なくない。

第二に、遠くにいる親族に対してこの関係が思い出されるのは、結婚や葬儀の時である。調査期間中に、婚約の儀を行った家族 (No. 12 の息子と No. 11 の娘) があつたが、婚約式の前に行つた聴き取り調査では、その世帯主の両親のキョウダイの移住や婚出についても不明な点が多かつたが、その後の調査では、系譜関係のみならず、移住先まで明らかになつた。その理由は、婚約式のために近くにいる bolu moi が集まつて相談した時に、遠くにいる者についてもその消息が明らかになつたという。2カ月後に予定された結婚式には遠く Morotai や Maba にいる bolu moi も招待する。この親族たちは、それぞれに贈物を持ってやつて来るが、現在では多くが現金であり、次いで乾燥または燻製した魚と米である。招待する bolu moi の数は20~30人ということであつたが、その結婚式までは滞在できなかつた。

また葬儀に関しては、隣村 Lalonga で埋葬に参加する機会を得たが、ここにも遠く Maba, Loloda から bolu moi が集まつていた。(結婚や埋葬については別に報告する。) 一般に、結婚や葬儀に際して、血族が婚資や饗宴に経済的援助を主とした贈物をするのに対して、姻族はより儀礼的な贈物、例えば、jungutu という花ござ、白い布をするようであるが、更に詳細な資料が必要である。

第三に、人びとは移動する時に bolu moi を頼りに一時寄留し、やがて自分の生計を立て独立する。現在他出している8名の青年について彼らの親たちに尋ねてみると、遠くの bolu moi のところに遊びにいっているという。その目的は大変あいまいであるが、他村から Limau 村にやつて来た人びとの結果から判断するなら、その多くの場合、「嫁探し」が重要な目的ではないかと考えられる。この他、この村にも絶えず

他村から親族が遊びに来ていて、来客なのか同居人なのか区別のつかないような生活をしている家もあった。彼らは家族の者と畑や山で協同に作業をしながら長期滞在するのが普通である。観察者の眼には、親族は自分の家族と同じほど密接な関係で結ばれているように映った。

実際、Limau 村の人びとは、少なくともこの2-3世代は、この kinship network の中で移動を続けている。更にこのような高い移動性という社会的特徴は、Galela 族のみならず、北ハルマヘラすべての種族に共通するのではないかと考えられる。

5. Limau 村における人口の移出入

村人たちに彼らの移動の動機や目的について尋ねてみても、「遊びにいった」とか「遊びに来ていて結婚したのでここに住むようになった」、「サゴヤシや畑がいくらでもあるから」、「木材を切り出しに来ていてここは生活が楽にできると思ったので」など非常にあいまいで、むしろ特定の動機や目的を持たずに来住し、生活と関連したさまざまな状況の中で偶然ここに落ち着くようになったといった方がよいのかも知れない。人びとの間にまだ「出稼ぎ」という認識は明確でないようである。

a. 移住と来住の資料から

ここでは現在 Limau 村に居住する家族とその祖先についての資料から人びとの移住と来住について、その代表的と考えられるいくつかのケースを記述してみたい。

まず、資料の提示に際していくつかの問題を指摘しなければならない。それは彼らの移動に一定の方向性を見出すことは困難で、それぞれ個人が直面する社会的状況の中で多種多様な方向に向かって選択しているのである。一般に、未婚者の場合は定着期間が短く、あちこち移動する。結婚後、Limau 村に帰って来るタイプ、その処に定住し、その子どもたちの代になって誰かが親の出身地に帰って来るタイプなどさまざまである。

次に、親や祖父母の世代に関しては、口述者が、彼らの短期滞在した場所を記憶していないため、その正確な移動の経路を辿ることは不可能である。今の世代に比べれば、2~3世代以前には移動は低いように思われるが、基本的には現在と大きな変化がないと言ってよい。最後の問題は、このような一世代の間の、また世代を越えての複雑な移動の経緯を資料として提示する方法に関してである。これは今後更に検討を続けることにして、ここではいくつかのタイプを例示することにしたい。

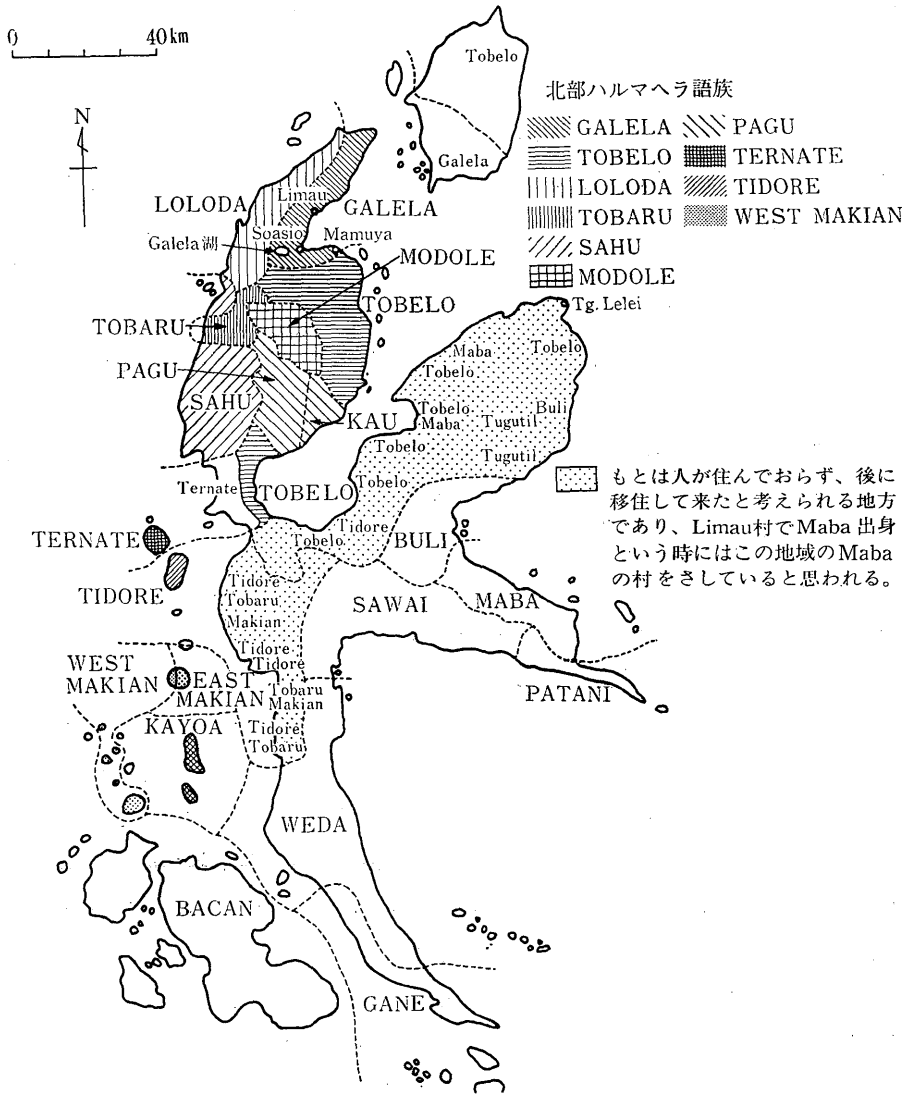


図4 ハルマヘラ島とその周辺地域

この図は Eddi Masinambo の図をもとにして吉田が作成した図にいくつかの地域名を加えたものである。【吉田 1977: 444】

① 2地域間の往復 (S 家の場合)

現在 No. 17 の世帯主である I 氏の曾祖父母は、Limau の出身であった。その子供、即ち I 氏の祖母とそのキョウダイは Limau で生まれ、ここで成長した。祖母は同じ Limau の出身である祖父と結婚した。やがて彼らは夫婦で Morotai 島に移住

した。その頃この島には Galela 族の移住村がいくつか出来ており、祖父母の兄弟はすでに単身そこに移住し、兄はそこで出会った Galela の女と結婚していた。従って彼らの子どもたちは Morotai で生まれ、育った。I 氏の父はそこで Galela の女と結婚、その後 Limau に帰って来たが、やがてまた Morotai に戻った。彼の姉2人は Limau で生まれたが、彼は Morotai で生まれた。父はその頃からその島でココヤシを植え始めたという。1963年頃に母が死亡、1966年に父と姉と共に Limau に帰って来た。長姉は Morotai で Galela の男と結婚し、現在もそこに居る。父は以前 Morotai に遊びに来ていた Tunjung Lelei 出身の女と1969年 Limau で再婚し、その家族は No. 19 に世帯を持っている。他方 I 氏は1971年に Limau で現在の妻と結婚した。彼らはここに定住するつもりであるらしい。

更に彼の祖母には6名のキョウダイがあり、その人たちも一時期は他村に住んだことがあるが、結婚後ほとんどがこの村に定着したため彼らの bolu moi は多数この村に居る。また父のキョウダイ4名についても同じような Morotai—Limau 往復の移動がみられる。この一家は、その島にココヤシ林を所有しており、現在も収穫の時には一時的に移動するが、彼らはこの村を自分たちの本拠地と認めている。

それでは、この S 家一族の移動の動機や目的は何であったのだろうか。彼らのどの一人に尋ねても、何となく移動したというような答えしか返って来ない。唯彼らは、Limau は自分たちの祖先の地であり、生活資源の豊かなよい土地であるという。それではもう Morotai 島には移住しないかと尋ねると、それは分らないという。なぜならそこには親族も大勢おり、ココヤシ林もあり、かつて自分たちの開いた畑もあるというのである。彼らを動かすものは、経済的理由のほかに、例えば配偶者を求めるとか、近い親族（キョウダイやイトコたち）から、また親しい友人から協力を求められるとか、この村にマラリヤが流行するといった偶然的な状況があるのではなからうか。同じような型がこの村の核を作っている他の H 家、K 家にもみられる。後者の場合は、同じ Galela 地域の村 (Ngidiho と Mamuya) の間の移動であり、互いの村の間で配偶者を見出し、結婚後は出身地に戻るといった場合が多い。

② 広域にわたる移動 (M 家の場合)

現在の世帯主 A 氏の祖父母は共に soa Gilitopa (かつては Limau の中心 soa) の出身であった。祖父母のキョウダイは、北ハルマヘラのおちこちに婚出していったらしく、その子供たちは Maba や Kau や Galela の他村に散っているという。A 氏の父は Gilitopa に留まり、Limau 出身の母と結婚した。母の弟は、一人は Bacan

に、他は Maba に婚出した。母方のイトコモ、Kau や Tobelo にいた。彼と彼の弟たちは若い時には、あちこちの親族のところを渡り歩いていたという。弟たちは結婚するまでに一人は Kau, 他は Maba で死んだ。彼は最初 Tobelo でその女と結婚、世帯を持って一子をもうけたが、間もなく離婚、同じ Tobelo で Galela の女と再婚して3人の子どもをもうけた。ところが、その妻は死亡したので、3人の子どもを連れて Limau に帰って来た。彼は Mamuya で知り合った女と三度目の結婚をし、Limau に世帯を持ったが、彼女も2女を生んで死亡、その後、寡婦であった Soasio 出身の現在の妻と4度目の結婚をして現在に至っている。彼は今では数少ない soa Limau の出身であり、若い時にはあちこち遊び歩いたが、いずれ Limau に帰ろうと思っていたという。

M 家の一族は、広域に散っており、その親族を頼って互いにあちこちに移住するが、A 氏の妹はこの村で生まれ育ち、夫を迎えてここに定住して来た。A 氏の記憶する限り、5 世代に及んで少なくともその子孫の一家族はここを離れずに来たのである。

このように、広域にわたって親族のネットワークを持ち、絶えずあちこちに移動しながらも、2～3 世代に及んでこの村に定住している家族は No. 15, 16, 23, 26 に見られる。

③ 祖先の地への回帰

No. 5 の夫、No. 17 の妻、No. 23 の妻の場合には、それぞれ Maba, Loloda, Kau からすっかり親族もいなくなった祖父または祖母の出身地に単身または親と移住して来て、この村で配偶者を得て結婚している。彼らの祖父母は結婚後、他村に移住、父母の世代にも更に他の地域に移住、しかしその子どもの一人がここに来住したのである。この場合来住者自身は祖先の地に帰って来たという意識よりは、知らないところではなかったから来住したという程度であって、彼らの来住の動機や目的も不明である。

④ Maba からの来住

P 家3兄弟 (No. 9, No. 30, No. 33), T 家2兄弟, K 氏 (No. 29) と B 氏 (No. 18) はいずれも Maba の出身である。彼らは未婚の青年であった時、兄弟や友だちと共に故郷をはなれ、あちらこちら渡り歩いて Limau 村にやって来た。しばらくここで木材を切り出したり、サゴを採ったりしているうちに配偶者を見出し結婚し定住

している人たちである。今その一人R氏の life-history (石毛探録) からその一例を引いてみよう。

彼の父や兄は Maba で生まれたが、彼は Lolobata で生まれた。8人キョウダイで男1人、女1人は幼少の頃死亡、現在は兄と妹3人が、それぞれ結婚して Maba に住んでいる。彼と弟は Limau 村にいる。

彼は第2次大戦中、兵補として Kau にいった。そこで畑仕事をやらされたり見張りをやらされて7カ月ほど過ごした。やがてアメリカ軍がやって来たので、Kau の山奥の村に逃げ、そこで16カ月留まった。終戦後 Lolobata に帰りそこに家を建てた。1948年父が死んで間もなく、Tobelo の近くの Pidiwan 村に移住、そこで4カ月中国人のココヤシ畑で働いた。その後 Tobelo に移り、再びココヤシ労働者として2カ月雇われた。その頃 Limau 村には Maba の人が移住しており、サゴヤシが多いと聞いていたので、1949年にここにやって来た。続いて1951年に弟の家族が母と共にここに来た。彼は1963年にこの村の女と結婚したが15カ月で離婚した。今弟の息子の一人を養子にしている。彼は故郷である Lolobata にいつかは帰りたいと思っているのでこの村では畑を開いていない。彼はサゴ澱粉を採取したり、漁撈に従事したり、また呪術医として Soasio あたりまで出かけてかなりの現金収入を得ている。

他の Maba からの来住者は R 氏よりも年が若く、恐らく戦中、戦後の生まれであろう。しかし彼もまた同じような経路で Limau 村に来住している。Maba と一般に人びとが呼んでいる地域には相当以前から Galela 族が新開村を作っており、互いの間に婚姻関係もあり、人びとの往来もあったことは確かである。しかし Maba からの来住者は、その多くがこの村におけるサゴ、漁獲、そして森林資源の豊かさを知り、移住の目的をもって故郷を離れたのでなく、あちらこちらさすらった末ここに定住することになったのである。

⑤ Y 家族の場合 (No. 20, No. 22)

Y 家族は Menado の出身で、1972年親族4家族が北ハルマヘラへの移住を決心して Galela にやって来た。移住に際しては North Sulawes 州政府から許可書を得る、Galela 県庁と Limau の村長に届け出て許可を得た。彼らの来住は計画的で、Menado にいる頃、北ハルマヘラの事情に詳しい友人から Limau 村には資源が豊富で気楽に生活できると聞いていた。Galela に来て、自分たちと長男の家族は Limau に、彼の弟とイトコの家族は Pelita 村に定住した。現在では3筆の畑とココヤシ畑を作り、自分でカヌーを作って漁撈に従事し、森林で木を切り出して角材にし

て売り、現金収入を得ている。

この2家族は今も Galela 語を全く理解せず、村びとたちとはインドネシア語で話す。彼らは村落共同体の中ではかなり孤立した存在であるが、キリスト教徒として村のキリスト教徒のコミュニティでは積極的に教会を中心とした活動に参加しており、日常生活における協力関係を持っている。

b. Limau 村の構造

村長や村の古老によると、現在の Limau 村の南北に9つの soa があった。それらの soa がオランダ行政のもとで現在の村に編成されたのである(図5参照)。現在でもかなりの村びとたちは自分たちの父母や祖父母がどの soa に属していたかを記憶している。9つの soa のうち、Dagasuli, Niharama の人びとは Bacan へ、Bakutu の人びとは Soasio へ、そして Momojin と Woge の人びとはあちこちへと、次第に移住し、現在ではその bolu moi は残っていない。

他方、Limau 村もその成立以来、幾度も集落の位置を移して来たようである。記憶されているだけでも、1949年には現在の村の北端を流れる川の上流に移動し、1964

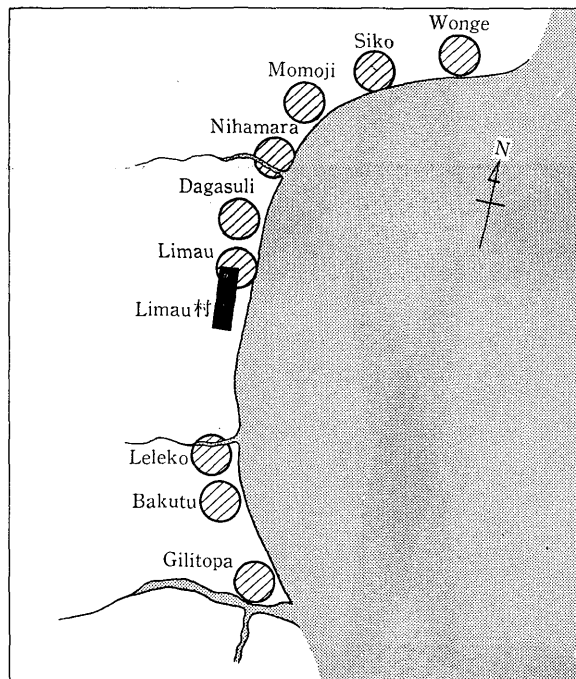


図5 Limau 村に併合された soa の旧所在地 (吉田採集)

年にそこから現在地に移った。集落が以前の場所にあった時、マラリヤが流行して人口が減少したということである。調査時に、その翌年には海岸側の家々をイスラム寺院の裏側に移動する計画があった。その理由は、雨期にそれらの家々が浸水するからである。

この村ではイスラム教徒33世帯とキリスト教徒8世帯がそれぞれ近隣集団を形成している(図1参照)。2~3年前に家を建てたという Maba からの来住者の家族は、イスラム教徒でありながら、キリスト教徒のコミュニティに住んでいるが、やがて家を移すということであった。しかしこれら宗教の相違による2つのコミュニティの分離は、村びとたちの形式的な宗教生活における諸活動の側面での分離であり、共同体としての村の諸活動や共同作業への参加には相違や差別はなく、相互の反目や葛藤もみられなかった。例えば S 家の如きは、兄弟、イトコが異なるコミュニティに属し、村落の両端に分かれて居住しているが、彼らは互いに bolu moi として社会生活の上で協力し合っているし、宗教の相違による障害は見られない。またこの村落共同体自体が非常に開放的な構造を持っていることが何よりも相互の緊張関係を生じさせない原因であると思われる。Y 家のように新来住者にとって村落共同体への参与の門戸はイスラム寺院やキリスト教会の礼拝や諸活動への参加から開かれていくようである。

Limau 村の村落共同体としての構造的特徴は、一言にしていうなら、閉鎖的な構造を持たないことであろう。しかし、人口の流出、流入を繰り返す、絶えず再編成されていくこの村にも村の核となっている一群の家族が存在する。第1図に示した S 家、M 家、H 家、K 家はその曾祖母はそれぞれ Soa Gilitopa, Soa Limau の出身であり、これらの soa の人びとが核となって新しい行政村 Limau 村が構成されて来たと考えられる。現在の村の指導者たち、村長、助役、書記、慣習法首長などすべてこれら4家の人たちである。彼らは村民会議で推薦された公的な行政指導者であると同時に「村の生え抜き」として社会生活のさまざまな側面で、たとえその影響力はそれほど大きくなくても、指導者としての役割を果たしている。

おわりに

Limau 村のように移動性の高い社会では、その家族は小さな単位で構成され、絶えず分裂する構造を持ち、親族組織も永続性のある固定的集団を形成せずに、むしろ関係概念で捉えられ、大きくも小さくもなる親族関係のネットワークで結ばれている。更に、村落共同体も中心になる家族を包含しながらも、来住者を受け入れ、婚姻関係

によって親族のネットワークで結びつく共同体の中に組み込んでいくことのできる条件と構造を持っている。

人びとの移動に関しては、それを促す要因とそれを受け入れる条件を考えなければならぬ。その受け入れの条件としては、先に述べた社会構造という見地から、Limau 村だけでなく Galela 社会や多分、北ハルマヘラ全体が、非常に開放的な構造を持っていることが重要なことであると思われる。更に社会・経済的条件として、自然に繁殖するサゴヤシや豊富な漁獲資源、海上交通の容易さがあげられよう。問題であるのは、人びとの移動を促す要因が何であるのかということである。この社会での移動は、流出地と流入地の間での生活水準の地域差や、それによる一方向への移動でないことは資料から明らかである。「嫁さがし」は一つの要因であるかも知れない。この問題は今後の調査研究に待つ他ない。

謝 辞

この報告は、私の煩わしい調査にも快く応じ、資料を提供して下さいました Limau 村在住の方々のご協力に負っている。また Pattimura 大学の Soukotta 氏の通訳の労なくしてはこの資料の収録は出来なかった。更に石毛直道隊長以下メンバーの方々には現地調査から現在に至るまで終始一貫して惜しみない協力と助言とを与えていただいている。ここに記して深い感謝の意を表します。

文 献

- BAARDA, M. J. Von
1895 *Woordenlijst: Galelareesch-Hollandsch.* S-Gravenhage, Martinus Nijhoff.
吉田集而
1977 「サゴヤシの民俗分類について」『植物と文化』20: 50~57。